OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語』における神奈備皇女の位置付け
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 1994, 15, p. 88-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『松浦宮物語』における神奈備皇女の位置付け

山崎　淳子

『松浦宮物語』の第三段「皇女入内」（章段・見出し・歌番号は角川文庫による）、第四段「遣唐の宣旨」には、次のような贈答歌がある。

・弁は、物おもひそひぬる心地して、ちちの殿にまゐりてうちふしたれど、めもあはず。いととうおきて、女王の君のもとにふみかきたまふ。「きのふなむ、行くらむわきもはじめて思うたまへられしかば、うれしき月日なれど、なほかくばかりのみまさる心ちし侍れば、ちへなみしきてもすべなき世をなむ思うたまへわびぬる。いでやおしはからせたまへ。

7もえにもえて恋ひば人みてしりぬべきなげきをさへにそへてたくかな」

とあるをみせたてまつれば、あはれとやおぼすらむ、ただかくなむ。

8見てしかば我こそけなめもえにもえて人のなげきはたきつくすがに

・いまはといでたちて京をいづるに、たかきいやしきむまのはなむけす。よすがらふみつくりあかして、いでなむとするに、いみじうしのびてたまへる、神奈備の皇女、

13もろこしのちへの浪まにたぐへやる心もともにたちかへりみよ

いまはとまゐり給ひしのち、ひとこと葉の御なさけもなかりつるを心うしと思ふに、なほをりすぐさずのたまへるをみるに、血の涙をながせど、つかひはまぎれうせにければ、ただとどまる人につけて、女王の君のもとに、

14いきのをに君が心したぐひなばちへの浪わけみをもなくがに

前者は男主人公弁少将が初恋の女性神奈備皇女に胸中を告白した翌朝の場面、後者は弁少将が渡唐するため京を出る直前の場面である。本稿はこの二つの贈答歌を中心に、神奈備皇女の物語における位置を考察するものである。

各歌の内容を検討する前に、八・十四番歌に用いられている「がに」について少し触れたい。『松浦宮物語』冒頭から渡唐に至るまでに万葉的表現の多用されていることは従来指摘され

ているが、「がに」もその一つである。この語に関しては類似語「がね」とともに、宮嶋弘（1）・佐伯梅友（2）・堀川喜美子（3）・吉田金彦（4）・小倉肇（5）諸氏によって様々に論じられているが、本稿でその正否を断ずることはできない。各論の詳しい内容は割愛するとして、『万葉集』の具体的な例を次に挙げる。

・道相而（ミチニアヒテ）　咲之柄尓（エミシセノカラニ）　零雪乃（フルユキノ）　消者消香二（ケナバケヌガニ）　恋云吾妹（コフチフワギモ）

（巻第四　相聞　六二七番）

・秋田苅（アキタカル）　借廬毛未（カリイホモイマダ）　壊者（コボタネバ）　雁鳴寒（カリガネサムシ）　霜毛置奴我二（シモモオキヌガニ）

（巻第八　秋雑歌　一五六〇番）

二例目を見ると、この歌は四句で一旦終始し、五句が倒置された形になっている。このような二段構成をとるのは、「がに」よりもむしろ「がね」の方が多い。しかし中古以降ではもっぱら「がに」が使われ、『古今和歌集』巻第七・賀歌の、

ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀、九条の家にてしける時によめる　　在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに（三四九番）

のように二段構成をとるのが普通である（右の場合二句切れ）。加えて、後に挙げる古注釈にも記されているが、当時「がに」と「がね」は区別されていなかったようである。『松浦宮物語』の八番歌は二句切れと考えられ、「がに」も文末に置かれている。典型的な「がに」の詠まれ方であるといえるだろう。

では作者と目される藤原定家の時代に「がに」はどう理解されていたのだろうか。前掲の『古今和歌集』歌に対する古注は次のようになっている。

・教長卿云、老ノコムミチニ、サクラチリカヒマガヘト云也。ミチマドフガニトハ、マドフバカリト云也。（中略）ガニトハガトイフコトバニ、ニヲグシタルナリ。ガネトモ萬葉ニハヨメリ。…　　（顕昭『古今集注』）

・…道まどふがにとは、がにといふ詞は、萬葉に多よめり。ばかりと云心歟。がねともよめり。同五音なれば、同じ心にかよひてよめり。がにと云心も、がねといふ詞も、皆ばかりと云とみえたり。

がにの詞又同。がねといふ詞を、賀歌詠ずる、有其興歟。　　（『顕注密勘』）

右の記事から「がに」「がね」ともに「ばかり」の意と解されていたことがわかる。実際八番歌の「がに」は「ばかり」と解釈してさしつかえない。

ところが十四番歌の「がに」は八番歌の「がに」とは性格を異にしているようである。角川文庫では「だろう」という訳を当てており、『松浦宮物語総索引』（6）はそれを受けてか、終助詞として扱っている。十四番歌は二段構成をとっていないのにも関わらず「がに」が五句末に位置しているため、この語を「ばかり」で解釈することができないのである。このような「がに」の用法は、『松浦宮物語』だけではなく、既に『万葉

集』に類似のものが存在する。次にその例を挙げる。

・大夫之　弓上振起（マスラヲノ　ユスエフリタテ）　射都流矢乎（イツルヤヲ）　後将見人者（ノチミムヒトハ）　語継金（カタリツガネ）（巻第三　雑歌　三六七番）

・白玉乎（シラタマヲ）　都都美氏夜良波（ツヽミテヤラバ）　安夜女具佐（アヤメグサ）　波奈多知婆奈尓（ハナタチバナニ）　安倍母奴久我祢（アヘモヌクガネ）（巻第十八　四一二六番）

ここで注意されるのが「…ば、…がね」という十四番歌に極めて近い形を持っている二例目である。中古では『曽祢好忠集』冒頭の長歌、

…おこなれとおやのつけてし名にしをはゝ　なをよしたゝ
と人も見るかに

にこの形を確認でき、「がに」という点も共通している（7）。十四番歌の形は『松浦宮物語』独自のものではなく、先例のあったことがわかるのである。『松浦宮物語』の作者は、「がに」（「がね」）に二つの詠み方のあることを意識していたのではないだろうか。十四番歌が八番歌とごく近い位置にあること、当時「ばかり」という解釈が「がに」に与えられていたということを考え合わせると、作者がよく理解しないまま「がに」を十四番歌に用いたとは思われない。もし『松浦宮物語』内で「がに」の使い分けがあるという推測が許されるならば、その点でこの作品には実験的側面のあるということがいえるであろうし、作者の『万葉集』理解の一様相を示すものとしてまことに興味深い。ただし中古以降での「がに」のこのような詠まれ方は、現在のところ『曽祢好忠集』と『松浦宮物語』の二例しか見出せず、右に述べたことは憶測の域を出るものではない。十四番歌の「がに」に対する解釈も、角川文庫の「だろう」や、希望・推量を表す終助詞的用法として『万葉集』・『曽祢好忠集』の現行注釈書が提示する「～するように」「～するために」以上のものを本稿で挙げることはできない。

右のことを確認した上で、一つ目の贈答歌の考察に移る。七番歌の記された手紙には、「行くらむわき」「ちへなみしきて」「すべなき世」という『万葉集』から引用された語が散りばめられている（特に「ちへなみ」は十三・十四・六九番歌にも類似の語があり、作者の好んだ表現といえよう）。七番歌の「恋ひび人見て知りぬべき」も角川文庫補注三六の指摘するように、『万葉集』巻第十一の、

色出而（イロニイデテ）　恋者人見而（コヒバヒトミテ）　応知（シリヌベシ）　情中之（コヽロノウチノ）　隠妻波母（コモリヅマハモ）（二五七一番）

を引用しているとみてよいだろう。付け加えるならば、『後撰和歌集』巻第二・春中の、

やよひのついたちごろに、女につかはしける
なげきさへ春をしるこそわびしけれもゆとは人に見えぬものから（六五番）

あたりが参照されているかもしれない。修辞に関しては、「燃え」「恋（火）」「歎き（投木）」「焚く」を縁語・掛詞とする角川文庫の脚注も妥当である。ただし「投木に嘆きをさえ添えて、思慕の情をもやすことですよ」とする下句の解釈は「投

木という嘆きまでも私の恋心に添えて焚くことですよ」でよいと思われる。

八番歌は角川文庫では次のように解釈されている。

あなたのお心は、その投木も嘆きも焚きつくしてしまう程にあまりにも燃えさかっているので、もし私があなたに逢ったら最後、それこそ私は焼きつくされて死んでしまうことでしょう。

「がに」を「程に」としているのは適切であるものの、他の部分に幾つか問題があると思われる。まず「見てしかば」を「逢ったら最後」と仮定のように訳すのには無理がある。これは「あなたに逢ったので」と解すべきではないだろうか。また「もえにもえて」いるのは弁少将と解釈されているようだが、むしろ八番歌において胸の炎を燃やしているのは、神奈備皇女と考えられるのである。神奈備皇女は、弁少将が七番歌で「もえにもえて」いると詠んだことを逆手に取り、「『もえにもえて』私の方こそ消えるだろう」と返したのではないだろうか。これらを鑑みて八番歌解釈の試案を出すと次のようになる。

あなたに逢ってしまったので、恋の炎で燃えさかって私の方こそ消えてしまいそうです。あなたの投木という嘆きを焼きつくす程に。

こうみると神奈備皇女の歌は、配流される恋人の行く道を焼き滅ぼしたいと詠んだ狭野弟上娘子の歌（8）にも劣らない、非常に情熱的なものといえるだろう。もちろんこの一首だけをもって神奈備皇女が情熱的な女性として造形されているというわけではない。しかし七・八番歌の次の贈答歌（十三・十四番歌）は、それまでの贈答歌とは逆に神奈備皇女が弁少将に詠みかけるものとなっている。また弁少将渡唐後、華陽公主や鄧皇后の登場によりその存在が薄れ、帰国後に付け足し程度で再登場させられているとはいえ、神奈備皇女はもう一度弁少将に歌を詠みかける。そこには彼女の積極的な態度を見出すことができるのである。このような神奈備皇女の態度、八番歌で「見てしかば」と明言していること、菊の宴の翌朝弁少将が「行くらむわき」を初めて知り、嬉しいと思っていることの背後には、二人の確かな契りが想定できるのではないだろうか。

続いて十三・十四番歌について検討する。十三番歌は渡唐する弁少将に自分の心を連れ添わせるから、日本へ帰ってきて再び逢ってほしいという内容であろう。『古今和歌集』巻第八・離別歌に、

あづまの方へまかりける人によみてつかはしける　いかごのあつゆき

おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる（三七三番）

とあるように、見送る者が旅立つ者へ自分の心を連れ添わせるという歌は多い。十三番歌は別れの場面で詠まれる歌としてはオーソドックスなものといえる。この贈答歌において問題としたいのは、十四番歌の五句である。この歌に対する角川文庫の

解釈は、

私の生命と共にあなたのお心が一しょについて来て下さいますならば、万里の波濤も物かは、きっと航路も平穏になることでしょう。

となっており、脚注では、

「身を」と「澪」、「投ぐ」と「凪ぐ」縁語・掛詞。

という指摘がされている。修辞に関していえば、「身を」と「澪」を掛詞とする用例は多いものの、「投ぐ」と「凪ぐ」が掛けられたものは現在確認できない。また十四番歌において「なぐ」が「投ぐ」と「凪ぐ」の掛詞とすると、前者は身を投げて船から離れる、後者は凪いだ海を船に乗って行くという反対の内容を持つことになってしまう。『平中物語』第一段には、

身のうみの思ひなぐ間は今宵かなうらに立つ浪うち忘れつゝ

という歌があるが、この場合の「なぐ」は「(思ひ)和ぐ」と「凪ぐ」の掛詞であり、不自然なものではない。十四番歌の場合、「なぐ」に掛詞が成立しているか否かは不明といわざるを得ないのである。

では五句に「澪も凪ぐがに」、「身をも投ぐがに」いづれを当てるべきであろうか。まず「澪も凪ぐがに」で解釈することが妥当かどうか考えてみる。十三番歌の「私の心をあなたに添わせる」という内容を受け、弁少将は「あなたの心が私に添うならば」と十四番歌を詠んだ。渡航中も彼は、十三番歌が記されていたであろう手紙を肌身離さず持ち、

20たぐへける人のこころやかよふらむおもかげさらぬなみのうへかな

と神奈備皇女を思う。そして船は無事唐に到着した。ここで注目されるのが、

おもひしよりも雨かぜのわづらひなくして、

という記述である。この部分には『浜松中納言物語』巻の一の、

孝養の心ざし深く思ひ立ちにし道なればにや、おそろしうはるかに思ひやりし波の上なれど、あらき波風にもあはず思ふかたの風なん、ことに吹きをくる心地して、もろこしのうむれいといふ所に、七月上の十日におはしましつきぬ。

が参照されている可能性がある。ただし『浜松中納言物語』の場合、海が平穏だったのは「孝養の心ざし」によるものとされている。それに対し『松浦宮物語』では、特に主人公の性格に対する言及はない。十四番歌の五句に「澪も凪ぐがに」と当てることができるのならば、海が凪ぐ条件は、上句で詠まれた内容、神奈備皇女の心が我が身に添うことである。実際に弁少将の渡航は平穏無事に済んだのであるから、神奈備皇女の心は彼のもとにあったといえよう。従って五句を「澪も凪ぐがに」とすることに一応の説明は与えられる。もちろん航海に関しては、『松浦宮物語』で繰り返し語られる住吉明神の存在を無視することはできない。事実、帰国に際しては「さしもまもりつよき御道のしるべなれば」という住吉明神の加護を思わせる記述も

ある。渡唐において海が平穏だった理由を神奈備皇女一人に求めるわけにはいかないだろう。しかし旅立つ者を守るために心を連れ添わせるという歌は、『古今和歌集』巻第八・離別歌に、

をののちふるがみちのくのすけにまかりける時に、ははのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとどめそ（三六八番）

という先例を見出せるのである。海を鎮め、唐まで弁少将を守護する役割の一翼を神奈備皇女は担っていたと考えることも可能ではないだろうか（9）。

「身をも投ぐ」についてはどうであろうか。この場合注意されるのが、弁少将が帰国後、嫉妬する神奈備皇女に対して自らの心変りを詠んだ、

69もろこしのちへのなみまにうきしづみ身さへかはれる心地こそすれ

である（10）。初・二句が十三番歌と重なることは明らかである。しかし十四番歌の五句が「身をも投ぐがに」ならば、「浪間に浮き沈んでいた身」は、それをも踏まえた上で発想されているといえる。神奈備皇女が、弁少将に海へ身を投げようとまで思い詰めさせる存在であったとすれば、二人の関係に決着を付けることは、華陽公主や鄧皇后との恋に興味が移ってしまった物語後半部において必要な要素であろう。十四番歌の五句を「身をも投ぐ」で解釈することも、否定はできないのである。

以上、二つの贈答歌を中心に考察を加えた。一つ目の贈答歌において論じたように、物語で一貫して描かれる神奈備皇女の積極さは、菊の宴を境として二人の関係がより親密になったことに帰結すると思われる。二つ目の贈答歌に関しては、結局十四番歌に対し満足な解釈を与えるに至らなかった。十四番歌の五句は「澪も凪ぐ」「身をも投ぐ」両方に可能性があり、どちらかに決定することは困難である。しかしいづれを取るにせよ、日本を離れ、唐へ渡ろうとする弁少将に神奈備皇女が深く関わっていると認めることはできよう。『松浦宮物語』における神奈備皇女の位置を再確認する必要があるのではないだろうか。

注

（1）「万葉集「がに」「がね」考」（「国語国文」8―6　昭13・6）

（2）「「がに」と「がね」」（昭和女子大「学宛」14―8　昭27・9）

（3）「万葉集の助詞「がに」と「がね」について」（「実践文学」37　昭43・7）

（4）『上代語助動詞の史的研究』（明治書院　昭48）

（5）「助詞「がに」の史的変遷―「がね」「べく」との交渉をめぐって―」（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』昭54）

（6）菅根順之編　笠間書院　昭49

（7）「…人も見るがねとおもふ心のあるにぞあるらし」という異文を持つ伝本もある。

（8）伊井春樹先生の御教示による。『万葉集』巻第十五の中臣宅守と狭野弟上娘子との贈答歌六十三首の中には、『松浦宮物語』第三段「皇女入内」で使われる「すべなきよ…」に類似する

己能許呂波　君乎於毛布等　須敝毛奈伎　古非能未之
都都　祢能未之曽奈久（三七九〇番）

や、三番歌に類似する

古非之奈婆　古非毛之祢等也　保等登芸須　毛能毛布
等伎尓　伎奈吉等余牟流（三八〇二番）

がある（角川文庫補注三一参照）。

（9）女性が渡海に関わる説話としては『和歌童蒙抄』第四のあづまとは日本紀七云、日本武尊相模国より上総国に往とす。海中にして暴風急起て王船漂蕩して渡べからず。王にしたがへる女あり。弟橘媛といふ。穂積氏忍山の宿祢の女也。王に啓して曰、風起浪涌して王船没す。是必海神心なり。願は賤妾が身王の命を贖て海に入と申す。言訖て乃波をかぶりて入。風即やんで船岸につく事を得たり。故時の人其海を号して馳水といふ。上総国より陸奥国転入、蝦夷既に平。

が挙げられる。『日本書紀』を原拠とする右の説話は、この類のものとして有名なものの一つであろう。「海が凪ぐ」あるいは「海に身を投げる」という点において注目すべきものと思われるが、『松浦宮物語』にこの説話が参照されているかどうかは不明である。

（10）帰国した弁少将の、神奈備皇女に対する冷たい態度が華陽公主や鄧皇后の存在に帰するものであることはいうまでもない。しかし弁少将と神奈備皇女に、『狭衣物語』の狭衣と源氏宮、あるいは阿部真弓氏が「『松浦宮物語』に見える須磨、明石巻の影」（「詞林」15　平6・4）で指摘される『源氏物語』の源氏と朧月夜が投影されているとすれば、二人の関係が疎遠になってしまうことはあらかじめ予定されていた展開と考えることができる。菊の宴の翌朝、弁少将が「うれしき月日」と思いながらも「すべなき世（どうにもならない二人の間）」と嘆くのも、二人の恋が初めから成就し得ないということを暗示しているかもしれない。

猶、各作品の本文は、『松浦宮物語』は角川文庫、『平中物語』『浜松中納言物語』は岩波古典文学大系、『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』は新編国歌大観、『曽祢好忠集』は私家集大成、『古今集注』『顕注密勘』『和歌童蒙抄』は日本歌学大系を用いた。

（やまざき・じゅん　本学大学院博士後期課程）